

スーチョワンバーラルの高齢個体に実施した角切除事例について

○藤田くるみ

(公財) 横浜市緑の協会 横浜市立金沢動物園

近年、飼育動物の高齢化が進むにつれ様々な疾患が増えており、動物園動物の高齢個体に対する QOL の向上や維持に配慮した対応がますます求められるようになってきている。今回、当園で飼育しているスーチョワンバーラルについて、高齢個体を含む群れ飼育を維持しながら実施したオスの角内部の腐敗による切除の事例を報告する。

対象個体(オス:2008年2月18日生)は2021年1月と9月に左角(先端から2/3)の一部が欠損した。その1ヶ月後の10月頃から異臭がするようになり角内部の異常に気付いた。予防的に抗生剤の投与と並行して、1週間ほど患部の洗浄、消毒を実施した。その後レントゲンにより角内部に空間があることが分かり、そこに液体が溜まって腐敗していることが判明した。11月下旬の診察時、角の先端部分が取れそうになっていたため、鞘が折れた際の骨損傷や患部の清潔な状態の維持などを検討した結果、切除に至った。個体が高齢ということを配慮して麻酔下ではなく保定下で実施した。

切除後すぐ群れに合流させたが、他個体から攻撃等受けることなく戻ることができた。高齢個体のケアとして、腐敗した角の切除は初めての事例であった。角の亀裂から細菌感染を起こしてしまったが、比較的早期に発見できたことで適切な処置を行うことができた。角の損傷は闘争を頻繁に行うリーダー格の年長個体で見られることが多いことから、今後は群れ飼育を維持するために、片角になったことによる影響を観察しつつ、レントゲンによる確認、損傷部分の修復など予防的処置を実施していきたい。